

日本中国語学会第5 関東支部拡大例会

2011年3月19日(土)

早稲田大学 文学部36号館382教室

地下鉄東西線早稲田駅徒歩3分

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 (<http://www.waseda.jp/bun/map/>)

早春の候、会員の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度第5回関東支部拡大例会を下記の通り開催することになりました。

7名の研究発表を予定しております。年度末のお忙しい時期ではありますが、皆様どうぞ奮ってご参加下さい。

日本中国語学会関東支部代表

山下 輝彦

問い合わせ先：

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学文学部中国文学科

山下 輝彦

mail:huiyan#pf7.so-net.ne.jp

(#をアットマークに変えてください)

【プログラム】

10:30 - 10:40 開会式

開会の辞 関東支部代表

開催校挨拶

10:40 - 11:20 ①大野 広之(慶應義塾大学・非)

満文資料に見られる真言陀羅尼についての一考察

11:20 - 12:00 ②施 正宇(北京大学对外漢語教育学院)

六书、偏旁与部件——汉字结构分析的历史演变

[以上司会：楊 凱榮(東京大学)]

12:00 - 13:00 昼食・休憩

13:00 - 13:40 ③齊藤 遥(早稲田大学・院)
二音節語における普通話第三声の聴取弁別実験

13:40 - 14:20 ④張 芑蕾(東京大学・院)
「来る」と“来”の対照研究 —発話時から指示時への視点移行を中心に—

[以上 司会：平井 和之(日本大学)]

14:20 - 14:30 休憩

14:30 - 15:10 ⑤林 芝羽(東京大学・院)
“有+N+VP”和“有+VP+的+N”结构的差异探析

[以上 司会：楊 達(早稲田大学)]

15:10 - 15:50 ⑥高橋 弥守彦(大東文化大学)
中国語の状況語について

15:50 - 16:30 ⑦砂岡 和子(早稲田大学)/徐 顕芬(早稲田大学アジア研究機構)
江 秀華(早稲田大学社会科学部)/鄭 偉(上海外国語大学)
中国人講師の中国語による講義の談話調整と受講効果

[以上 司会：山田 忠司(文教大学)]

【発表要旨】

① 満文資料に見られる真言陀羅尼についての一考察

大野 広之（慶應義塾大学・非）

乾隆年間には満文で書かれた言語資料が多数発刊されたが、仏教に関するものでは満文大蔵経を初めとして多数の書籍が残されている。就中、密教に関するものでは陀羅尼があるが、乾隆帝の仏教に傾倒した経緯から『御製満漢蒙古西番合璧大蔵全咒』が出版されている。本発表では、陀羅尼の中でも日本で主流を為す不動明王信仰に関するものをめぐって若干の考察を加えたい。日本で護摩修行されるときに念誦されるものとの比較を通じて、満文で書かれた陀羅尼から清朝当時の漢字音についても検討していきたい。

② 六书、偏旁与部件——汉字结构分析的历史演变

施 正宇（北京大学对外汉语教育学院）

六书、偏旁和部件是汉字研究与教学实践中常常使用的名词术语，但什么时候用六书，什么时候用偏旁，什么时候用部件，为什么要用六书，为什么要用偏旁，为什么要用部件，却是一个令人困惑的现象。

本研究从汉字结构分析的历史演变入手，考察分析六书、偏旁及部件出现及使用的文字学背景，研究三者之间的本质区别与内在联系，以期解答上述疑惑。

③ 二音節語における普通話第三声の聴取弁別実験

齊藤 遥（早稲田大学・院）

二音節語の第一音節に位置する第三声（いわゆる半三声）は「低下降」もしくは「低平」と表現される。本実験では、第三声の知覚について母語話者を対象とした聴取弁別実験を行い、(1) 調形は下降か平坦か(2) 「低」とはどのような音域か、という点を検証した。その結果、母語話者の第一音節第三声の知覚には調形の影響が少なく、下降・平坦・微上昇のいずれも相対的音域が低であれば第三声と知覚されることがわかった。

④「来る」と“来”の対照研究 —発話時から指示時への視点移行を中心に—
張 芃蕾（東京大学・院）

これまでの研究では、指示時と発話時の話し手の位置が異なり、話し手が指示時にのみ移動の到達点にいる場合、日本語は話し手の視点が到達点に移行して「来る」が用いられるのに対し、中国語では話し手の視点が発話時の話し手の位置に固定され、“来”は使用できないという傾向があるとされている。しかし、なぜこのような相違がみられるのかについては解明されていない。本発表では中国語においても視点が指示時に移行する現象があることを指摘し、視点移行が可能となる条件を明らかにする。さらに、池上（2000）の主張を援用して、指示時への視点移行にみられる日本語と中国語の相違は両言語の事象把握のしかたの違いを反映したものであると主張する。

⑤“有+N+VP”和“有+VP+的+N”结构的差异探析
林 芝羽（東京大学・院）

由动词“有”组成的连谓结构“有+N+VP”（如“有能力完成”）似乎皆能转换为“有+VP+的+N”结构（如“有完成的能力”）；反之，“有+VP+的+N”也似乎皆能转换为“有+N+VP”结构，但事实并非如此。如“有留学的经验”便不能转换为“*有经验留学”、“我有空去”也无法转换为“*我有去的空”。过去研究偏重于以“有+N”和VP的关系（即“有+N”须具有「能、可以」的语法意义才能进入“有+N+VP”结构）来解释，但却仍有例外。笔者使用语料库调查后发现，无法转换的原因在于「N和VP」的关系，而非“有+N”和VP的关系。即当N和VP是「同格关系」（相当于日文的「VPというN」，中文的“VP这一N”用法），且N和VP彼此不具有「工具格」关系（即不具「为了VP而具备有或产生出的NP」）此语法意义时，此时的N和VP无法进入到“有+N+VP”结构。

⑥中国語の状況語について

高橋 弥守彦 (大東文化大学)

中国語の状況語は、よく形容詞や動詞の前に用いるが、名詞などの前にも用いることができ、主語の前後にも用いることができる。(1) 那件绿的很好。(『実用 1』 p. 170) あの緑色の(スカート)がいいわ。(発表者訳) (2) 已经 12 点了, 但是谁也不想睡觉。(『実用 2』 p. 415) もう 12 時になりましたが、誰も寝ようとしません。(発表者訳) (3) 我现在认识九十个汉字。(『実用 1』 p. 155) 今、漢字を 90 字知っています。(発表者訳) 本発表では以下の問題点について言及する。1. 状況語は、一般に形容詞(例 1) や動詞などの前に用いるのに、なぜ名詞(例 2) などの前にも用いることができるのだろうか。2. 状況語は、なぜ主語の前後にも用いることのできるのだろうか。(例 3)

⑦中国人講師の中国語による講義の談話調整と受講効果

砂岡 和子 (早稲田大学)
徐 顕芬 (早稲田大学アジア研究機構)
江 秀華 (早稲田大学社会科学部)
鄭 偉 (上海外国語大学)

中国人留学生や中国圏で教育を受けた帰国生に加え、中国圏への長期留学を終え復学する日本人学生の増加に伴い、各大学で中国語による講義科目が増えている。本発表は、昨年度開講した中国語による文化講義時に観察された、中国語を母語とする講師の談話調整を、その言語形式的調整(音声、語彙、語法、談話などの調整行動)と機能的調整(明確化や確認など相互交流的特徴)から観察し、それぞれ受講者の理解促進にどのような効果をもたらすのか分析を試みる。得られた経験則は、中国語学授業の改善に生かせるだけでなく、一般の言語接触および異文化接触場面での談話方略に役立つであろう。